微笑

第６０号
令和４年4月15日
発行者
綾瀬市身体障害者
福祉協会

新年度に向けて

四月になり桜の花も満開になりましたが、新型コロナ感染症の流行は収まる兆しが見えてきません。

今年度も五月十五日に総会を予定していますが、マスク・消毒をした昨年と同様になります。

神奈川県、綾瀬市、綾瀬市社会福祉協議会も行事計画を立てていますが、開催方法の変更・手直し・中止の可能性もあります。

しかし、何時までもこの様な状況が続くとは考えられませんが、普通の日常生活が送りたいものです。

今年の総会には来賓はお呼びできませんが、会の行事予定、予算などを討議します。会場の保健福祉プラザも広く借りて密を避け席を離して準備をしていますので、心配しないで参加して会員の皆さんのご意見をお聞かせ下さい。

お待ちしております。

西川和朗

◎脊髄損傷の治療にiPS細胞移植

朝日新聞　一月十五日

慶応大は14日、iPS細胞からつくった神経のもとになる細胞を、症状が重い脊髄（せきずい）損傷の患者1人に移植したと発表した。iPS細胞をつかった脊髄損傷の治療は世界で初めて。経過は順調で、リハビリをしながら、今後1年かけて安全性や有効性を確認する。

移植の対象は、事故などで運動や感覚の機能が失われた「完全まひ」という最も重い状態で、脊髄を損傷してから2～4週間の「亜急性期」の患者。京都大iPS細胞研究財団が備蓄している他人のiPS細胞を使い、神経のもとになる細胞を約200万個つくって、損傷部に移植した。

脊髄損傷は、リハビリ以外に有効な治療法は確立していない。移植した細胞には、いたんだ神経回路を修復したり、脳からの信号を伝える組織を新たにつくったりする効果があると考えられている。慶応大は4人の患者に移植する予定だ。

慶応大の臨床研究の計画は2019年2月に厚生労働省の部会で了承されていたが、新型コロナウイルスの流行などで、患者の募集が延期となっていた。

◎重度障害者、親元か施設で暮らすしかない？　浸透していない制度

重度の身体、精神、知的障害がある人が日常生活の介護を1日24時間受けることも可能な、国の障害福祉サービス「重度訪問介護」（重訪）。原則自己負担がなく、親元や施設から自立して、地域で生活する人たちも増えつつある。

制度に関する情報提供やサービスの支給決定をする市町村との「交渉」を支援している「全国障害者介護保障協議会」（東京都）事務局の大野直之さん（51）に、制度利用の実態や問題点を聞いた。

（問い）重度訪問介護はどのようなものですか

（答え）基本的には、複数人の重訪のヘルパーが1日2～3交代で利用者のそばで待機し、食事や入浴、排泄（はいせつ）介助、家事援助、たん吸引などを行います。訪問看護やリハビリなどの別のサービスを使いながらの利用が認められることもある。外出時の介助も受けられ、家族が付き添わなくても出かけられる。何十年も施設や親元で生活していた人の一人暮らしも実現しています。

（問い）利用実態を教えて下さい

（答え）公的制度での1日24時間の介護は、１９９３年に東京都東久留米市で国内で初めて実現しました。国のホームヘルパー制度、生活保護の介護制度、都の制度を組み合わせたものでした。その後、２００３年に障害福祉の支援費制度という重訪の前身の日常生活支援が始まりました。個々の必要時間に応じた、最長毎日24時間の支給決定が北海道から九州まで多くの都道府県に広がっていきました。重訪は、２００６年施行の障害者自立支援法に基づき始まりました。17年に金沢市で1日24時間の利用が認められたことで、都道府県単位の24時間介護の事例の空白地はなくなった。

現在は、全国の利用者約1万人のうち、数百人が24時間の連続介護を受けて地域で暮らしている。都市部が多いが、離島や山間部、過疎地での例もある。一方で、全国約１７００の市区町村のうち、いまだに9割近くが1日24時間の介護実績がありません。

朝日新聞デジタル　3月1日

◎ｉＰＳ角膜移植
“安全性と有効性示す結果”
来年にも治験開始へ

ＮＨＫデジタルニュース
４月五日

大阪大学などのグループは、iPS細胞から作った目の角膜の組織を重い目の病気の患者４人に移植した結果、３人は日常生活に支障がない程度にまで視力が回復したと発表しました。グループは、安全性と有効性を示す結果が得られたとして、来年にも治療法として国の承認を得るための治験を始めたいとしています。

これは大阪大学の西田幸二教授らのグループが４日、会見を開いて明らかにしました。グループは「角膜上皮幹細胞疲弊症」という目の角膜が濁る病気のため視力が大きく低下した30代から70代の患者合わせて４人に対し、ｉＰＳ細胞から作ったシート状の角膜の組織を移植する臨床研究を３年前から進めてきました。

会見では移植から１年後の時点で評価した結果が示され、安全性については拒絶反応や感染症など重い副作用はなく、有効性についても、４人のうち３人は日常生活に支障がない程度まで視力が回復したということです。残る１人は、角膜の濁りはなくなったものの、視力検査の結果にばらつきがあり、評価が難しかったということです。ｉＰＳ細胞を使った今回の手法は、ドナーから提供を受けた角膜を移植するのと比べて拒絶反応のリスクが少ないとされ、口の粘膜から作った角膜シートを使う場合と比べても、より透明性が高いということです。西田教授は「明確な効果を示すことができ、大きな意義のある結果だ。世界中の患者によりよい治療を届けられるよう今後、臨床試験を経て、速やかに実用化を目指したい」と話していました。グループは、安全性と有効性を示す結果が得られたして、来年にも治療法として国の承認を得るための治験を始めたいとしています。

移植を受けた患者「見えていなかった遠くの文字が見えた」

今回の臨床研究でｉＰＳ細胞から作った角膜の組織の移植を受けた40代の女性患者が初めて取材に応じました。大阪府内に住む40代の女性は、６年ほど前に視界がぼやけるなどの違和感が両目に現れ、目の角膜が濁って視力が低下する「角膜上皮幹細胞疲弊症」と診断を受けました。しばらくは経過観察を続けていましたが、視力の悪化が進み、視界が暗くにごるようになって不安が募っていったといいます。女性は当時を振り返り「夜は真っ暗で前から歩いてくる人が見えなかったり、道路脇の溝にはまることもありました。不安でたまらなかったのでいくつかの病院に通いましたが症状は改善せず、見えなくなったらどうしようという気持ちでした」と語りました。

その後、女性は今回の臨床研究に参加することになり、最初の患者として３年前、左目に世界初の移植手術を受けました。その結果、左目の視力は改善して、裸眼で0.04ほどだった視力が手術から半年がたった時点で調べると0.6となり、その後も、日常生活に支障がないほどに回復しているということです。一方で、手術を受けていない右目は、いまも角膜が濁ったままでほとんど視力がないということです。女性は「手術後、しばらくして眼帯を外したときに、いつもと違う明るさを感じました。退院後の帰り道、今まで通っていた道ですが、これまで見えていなかった遠くの文字が見え、とてもうれしかったです」と当時の気持ちを語りました。視力が回復したことで、女性はそれまで控えていた家族との外出や旅行などを楽しむことができるようになったといいます。女性はｉｐＳ細胞への期待について「失明するかもしれないと思っていたものが見えるようになったのはｉＰＳ細胞のおかげです。これから研究が進展して１人でも多くの患者が元気になればいいです」と話していました。

『青い鳥郵便葉書の無償配布』

日本郵便株式会社は、重度の身体障がい者及び重度の知的障がい者に「青い鳥郵便葉書」を無料で配布します。

《対象》身体障がい者（１・２級）
《受付期間》４月１日～５月31日
《配布枚数》一人20枚
配布は４月20日以降（63円葉書）
《申出方法》
① 窓口でのお申出方法
最寄りの郵便局で障害者手帳を提示して、申込み書類に記入する。代理によるご提出でも結構です。
② 郵送でのお申出方法
郵便局にある申込用紙に記入して最寄りの郵便局に郵送すると自宅に送られてきます。

尚、不要の葉書がありましたら、身障協会へご寄付をお願いします。

「編集後記」

今年度もコロナ禍の船出ですが、この会報を編集中に、春の訪れを桜の満開を市役所で見たり、入学式を終えた小学生を見たりして、とても華やいだ季節です。この様な気持ちで毎日を過ごせることを願っています。総会その他で皆さんの元気な姿とお会いできることを願っています。

西川和朗